遺言ソフト？

「遺言ソフト」というタイトルだけを聞くと、大半の読者は、法的に有効な遺言書を作成するための専用ソフトのようなものを連想するかも知れないが、今回取り上げるのは、いい意味でその期待を大きく裏切ってくれるユニークなソフトウェアである。この遺言ソフトは有限会社シーリスが開発した「僕が死んだら…」というフリーウェアで、不慮の事故などで突然この世を去らなければならなくなったとき、PC に保存されている他人に絶対見られたくない情報（プライベートな画像や Winny などで違法に取得した動画など）が、誰にも気づかれないうちに密かに完全削除されるという、アイデア勝負の画期的ツールである。

論より証拠、では早速、このユニークなフリーウェアの使い方を紹介していこう。「僕が死んだら…」は、シーリスが運営するソフトウェア配布サイト「C-LIS Crazy Lab.」で手に入る。

遺言ソフト「僕が死んだら…」は、このソフトの開発者であるシーリスの有山圭二氏のある危険な実体験がきっかけで誕生した。それは彼が自宅でマイカーの車庫入れをしているときに起こった。運転席から首を出しながら車をバックさせているとき、誤ってアクセルとブレーキを踏み間違えてしまったのだ。車庫の壁と車との間に危うく首を挟みそうになり、間一髪のところで命拾いをしたのである。もう少しのところで、頭がもぎ取れてしまうところだったのだ。この危険な体験の後、彼は自分が所有している PC のプライベート情報が気になり始めたのである。

現代社会において、PC はプライベート情報の固まりとなりつつあることから、ウイルスや悪意のあるソフトウェアに対する防衛意識は高まってきている。しかしその一方で、利用者自身に不測の事態が起こった際、PC に保存されているプライベート情報をどう処理したらいいかという問題に対しては全く手つかずの状態である。相当数の PC ユーザは何らかの解決策を求めているのではないか、有山氏はそう考えるようになったのである。

そこで、思い付いたのが「僕が死んだら…」である。「家族による実行」という他律的ながら現実的なアプローチを採用する「遺言ソフト」という形で、この問題に対する 1 つの解決策を提供しているのである。

このアイデアを思い付いたのは 2007 年 8 月のことで、同年 10 月に開発が行われ、2007 年 12 月から公式リリースが始まった。ダウンロード数は初期バージョンで 7000、最新バージョンでもすでに 7000 を越えている。

「僕が死んだら…」バージョン 1.00 beta からは、メッセージファイルの暗号化機能が追加され、遺族向けのメッセージファイルは RC4 互換の共通鍵ストリーム暗号方式「Arcfour」で保存されるようになっている。そして、遺族がデスクトップのアイコンをダブルクリックした時点で復号化され、画面上にメッセージが表示される。つまり、デスクトップ上の「僕が死んだら…」アイコンをダブルクリックしないかぎり、メッセージファイルの中身を読むことができないよう工夫されている。

今後の機能強化としては、誰かが誤って「僕が死んだら…」アイコンをダブルクリックしてしまった場合に備えて、削除対象ファイルを完全削除するのではなく、暗号化を実行するように仕様を変更する計画がある。これなら本人が蘇生した場合でも元に戻すことが可能になる。

また、利用者からは、誤操作防止のために「僕が死んだら…」アイコンをダブルクリックしたとき、家族しか答えることができないような情報（自動車の免許番号やクレジットカード番号など）を入力させるなどの工夫を加えてほしいなどの具体的な要望も寄せられているという。

一方、メッセージファイルの内容を正式な遺言書にするという発想もあるが、残念ながら現在の法律では電子ファイル形式での遺言書は認められていない。そこで、遺言書が保管されている貸金庫の場所や暗証番号などの情報を知らせる手段にメッセージファイルを使うという方法も考えられる。

このほか、解決しなければならない課題として、削除対象に設定したファイルサイズが非常に大きい場合にはバックグラウンド処理に手間取るケースが考えられ、遺族がメッセージを読み終えるまでに削除処理が終わらない危険性がある。

また、遺言ソフトの存在が世間に知れ渡った時点では、バックグラウンド処理自体、あまり意味を持たなくなる。しかし、遺言ソフトの存在とその本当の役割を遺族が深く理解してくれるようになれば、「故人が見られたくないファイルは見ないでおこう」という深い思いやりによって、こうした課題が課題でなくなる可能性も十分高い。　　【キーマンズネット　http://www.keyman.or.jp/】